

外国語学習に 成功する人、しない人

第二言語習得論への招待

白井恭弘 著

by Yasuhiro Shirai

岩波書店

参考文献
おわりに

付録 知っておきたい外国語学習のコツ…………… 109

5 どんな学習法なら効果があがるのか…………… 81

4 外国語が身につくとはどういうことか…………… 63

3 外国語学習に成功する人、しない人…………… 43

2 日本人はなぜ英語が下手なのか—その2 母語の影響…………… 23

1 日本人はなぜ英語が下手なのか—その1 動機づけ…………… 13

プログラム

目次

外国語学習に成功する人、しない人
——第二言語習得論への招待——

プロローグ

外国語学習に王道はあるか

外国語をマスターする、ということは容易ではありません。私たち日本人は、中学、高校、大学と一〇年以上、しかもその間かなりの時間と労力を費やして英語を学びますが、まともに使えるようになるケースは稀です。巷には英語学習教材があふれ、どれを手にとっても、似たりよったり。そうかと思えば、「英語は勉強してはいけない」とか、「一日一〇分間き流すだけでペラペラになる」といったような、奇をてらった教材やノウハウ本が、爆発的に売れたりします。いったい、何を信用すればよいのでしょうか。効果的な外国語学習法というのはあるのでしょうか？ また、あるとすれば、それはどのようなものでしょうか？

日本でも、英語を使える日本人の育成が問題となつていますが、アメリカでは、二〇〇一年九月一日の航空機同時多発テロ事件を境に、政府が外国語学習の問題をより真剣に考えるようになりました。なぜテロ攻撃を防げなかったのか。これにはさまざまな

第二言語習得研究とは何か

子どもの母語習得(第一言語習得)と大人の外国語習得(第二言語習得)の大きな違いは、母語習得はほとんど例外なく成功に終わるのに、外国語習得は、母語話者のレベルまで到達できるかという観点からは、ほとんど例外なく失敗に終わる、ということです。これはなぜでしょうか。

外国語は母語に比べて使う機会が少ないからだ、という考え方もできますが、それはなぜ何十年もアメリカに住んで、アメリカ人と結婚し、アメリカ社会に溶け込んで英語を話して生活している移民の英語がネイティブのようにならないのか、という現象を説明できません。外国語学習のメカニズムを理解しなければ、このような素朴な疑問に対する答えさえ出てこないのです。第二言語習得研究とは、このような、第二言語学習に関するさまざまな疑問を科学的に解明することを旨とする学問分野だといえます。子どもの母語習得は、第一言語習得に比べれば、ほとんど誰にとっても同じような均質な状況でおこります。子どもはふつう、家族や近所の人などからことばを語りかけられ、それに対応して次第にことばを獲得していきます。このような例から外れる場合

「L1」という新たな研究分野です。

理由があげられましたが、その一つにアメリカ人の外国語能力の低さがありました。英語が国際語であるためか、アメリカ人は外国語があまりできないといわれています。そのせいで、テロリストたちが使っていた言語(アラビア語など)を解読できる人材が不足していたことが、諜報活動の妨げになった、という発想です。高い外国語能力をもった人材を育成するにはどうすればよいか。これは9・11同時多発テロ後のアメリカにとっては死活問題であり、そのような研究に多大な補助金が出るようになりました。社会における現実的な問題を解決しようとするれば、当然ながら、その問題についての専門家の意見を参考にすることになります。外国語学習については、伝統的には言語学、心理学の専門家がそのような役割を担ってきましたが、どちらの分野にとっても、外国語の学習というのは周知的な問題で、それほど真剣に研究が行われているわけはありません。また、外国語の学習というのはかなり複雑な要素が絡み合っているため、言語学、心理学の周辺分野として研究されているだけでは、十分にそのメカニズムの解明は進まないのです。

このような学問的な背景、そして外国語学習を効率よく行いたいという社会的要請を背景に、「外国語学習」という現象そのものを対象とした学問分野が一九六〇年代ごろから発達してきました。これが、「第一言語習得(Second Language Acquisition = S

このように、子どもの母語習得に比べると、第二言語習得はさまざまな状況が圧倒的に複雑です。

このような複雑な現象を理解するためには、さまざまなアプローチが必要となってきます。まず、「言語」という複雑なシステムの習得を対象とするため、言語学からの知識が役に立ちます。次に、「学習」という心的活動を扱うので、心理学的なアプローチも必要です。さらに、言語と社会・文化は密接な関係にあるので、社会学、文化人類学なども重要な示唆を与えてくれます。また学習はいうまでもなく脳でおこなうので、脳科学の観点からアプローチする研究者もいます。簡単にいえば、第二言語の習得・使用という認知活動を学際的に研究するのが「第二言語習得」という学問分野といえるでしょう。

本書は、過去四〇年くらいのあいだに第二言語習得研究が明らかにしたことを、なるべくわかりやすく伝えることを目標とします。もちろんまだわかっていることのほんの一部が多いのは、他の隣接分野(たとえば心理学、言語学など)と同じですが、扱っている対象がかなり複雑なため、わかっていることごとがとりわけたくさんあります。それでも、過去四〇年にわたる研究の結果、さまざまなことが明らかになってきたので、そこから、外国語学習はどのようにすればより効果的か、またどのような学習者が外国語学習に成

はあまりないのです。

一方、第二言語習得は、さまざまな状況でおこります。英語の習得を例にとってみると、韓国人の高校生が学校で英語を学ぶ場合と、メジャーリーグとしてアメリカに渡った松井秀喜がヤンキースの一員として英語を学ぶ場合と、メキシコからの四〇歳の移民が肉店労働をしながらアメリカで英語を習得する場合などは、条件がまったく異なるということです。さらには、この外的条件と内的条件は複雑に相互作用をおこします。つまり、外的条件が変われば、やる気も変わってくるし、やる気が変わってくると、自分から積極的に環境に働きかけたり(またその逆に消極的になったり)して、外的環境も変わってきます。

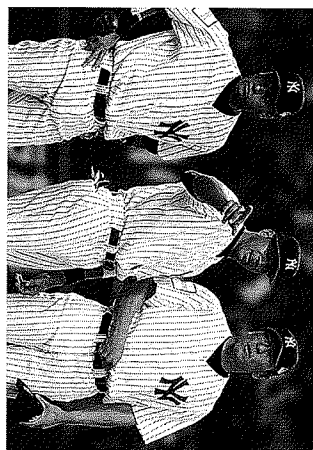


図1 デレック・ジーター、アレックス・ロドリゲスとことばを交わす松井秀喜 (REUTERS・SUN photo by Iseki Kato)

経験至上主義から科学的アプローチへ

読者のみなさんは、中学、高校の英語の授業で、「音読」というのをやらされた経験はありませんか。典型的な手順は、次のようなものでしょう。まず先生が「はい、じゃ田中君、次の段落読んでください」などと言ってひとりの生徒をあてる。生徒はキキーンという椅子の音を立てながら起立し、つかえながらも、なんとか読む。次に、先生（もしくはテーパーレコーダー）のあとについて、全員で音読。その後で、先生が、本文の内容を解説したり、生徒に訳させたりする。

この音読の方法は効果があるのでしょうか？ 英語教師はなぜこの方法をとるのでしょう。多くの場合、自分が英語を教わったときにそうやっていたから、という理由ではないでしょうか。しかし、この方法が効果的である、という証拠はどこにもありません。なぜ、生徒が本文の内容を理解する前に音読するのでしょうか。それにはどんな効果が考えられるのでしょうか。もし、音読を内容理解の後にしたらどうなるのでしょうか。これはすべて、検証可能な問題であり、また検証されるべき問題です。これが、第二言語

功するかといった、より現実的な問題に対しても、ある程度の答えが出せるまでになっ
てきているのです。

習得研究の考え方です。つまり、経験至上主義にとどまらず、より実証的、科学的に、より効果的な第二言語学習法を考えていくのです。

外国語学習と外国語教育は表裏一体の関係にあります。学習者がどう学習するかは、教師がどう教えるかによって、大きく変わってきます。もちろん、学習者が自分で決められる部分もありますが、学習方法は教師が決める部分が大きい。本書の読者は、すでに高校や大学を終えて、かなり自律的に学習している人が多いでしょう。自律的な学習の際にも、やはり手さぐりの状態で、これをやったらよさそうだ、とか、この方法でやったらかなり力がついた（ような気がした）ので今回もこれでやる、という感じで学習法を決めているのが実状ではないでしょうか。学習者の側も、教師の側も、科学的な研究成果にもとづいて、言語学習、言語教育の方法をより効果的なものに高めていく必要がある。あるいはいうまでもないのですが、現状ではなかなかそうはいきません。

似たような例としてスポーツ科学をとりあげてみましょう。

筆者は昔、中学・高校でバスケットボール部に所属していましたが、そのころは「腹筋運動をするときに膝を曲げてはいけない」と教えられていました。つまり、膝を曲げて腹筋運動をすると、腹筋に負担がかからないから簡単にできてしまっ腹筋が鍛えられない、というのが、そのころが、その一〇年後、体育の先生に聞いた話では、腹

筋運動をするときに膝を曲げないでやると、腰に負担がかかって腰を痛める危険がある
 ので、腹筋運動をするときは膝を曲げたほうがいい、というのです。そして、このよう
 なことはいわゆるスポーツ科学では当たり前の常識になっていたそうです。つまり、経
 験でやってきたからといって、またそれがある状況においてうまくいったからといって、
 必ずしもそれが正しいものではないということです。

このように、かつては経験則に頼ってスポーツトレーニングをしていたけれども、今
 ではスポーツ科学がどんどん発展して、それにもとづいてさまざまな技術革新がなされ
 ています。たとえば、イメージトレーニングという技法があります。ちょっと前までは
 そんなことは全然考えもしませんでした。今では、一流スポーツ選手は、大会までの
 練習のあいだ、自分が勝つところをつねにイメージしているということです。これを第
 一言語習得に応用すると、自分がネイティブどうまくしゃべっているところを想像する
 とか、そんなテクニックが実際に使えるかどうかわかりませんが、可能性としては考え
 られます。

実はこの話は、本書の第1章のトピックである「動機づけ」の問題とも絡んでくるの
 です。自分がネイティブのようにになりたいかどうか、ネイティブのように話したいとい
 う欲求があるかどうか、あるいはネイティブとまったく同じように話すことはできな
 いにしても、流暢に話すノンネイティブを一種のロールモデルとみなして、その人のよう
 に話したいという欲求があるかどうか、またそういう欲求がどれほど強いのか、というこ
 とが、その学習者がその外国語をどの程度正しく身につけられるかということにかなり
 影響してくるだろうと推測されますし、実際にそういう研究結果も報告されています。

こうしたことを背景に、英語ネイティブと対等にきれいな英語でしゃべっている自分
 を学習者がイメージして勉強することが学習効果を促進する、という仮説を立てる。そ
 して、これを検証するのが、第二言語習得研究なのです。こんな実験は誰もやったこと
 がないので、どういう結果が出るかはわかりませんが、できないことはありません。た
 とえば、グループA(実験群)とグループB(統制群)のうち、グループAだけにそれを毎
 日イメージトレーニングさせたらどっちが伸びたかとか、冗談みたいに思われるかもし
 れませんが、こういった実験をやってみることは可能です。

このような多くの実証的研究にもとづいて、第二言語習得研究という分野では、第二
 言語学習の原理がある程度明らかになってきています。そういう原理をふまえた第二言
 語教育・学習方法というものを今後は考えていかなければなりません。本書では、第二
 言語習得の研究成果をわかりやすくコンパクトにまとめて紹介するつもりです。現在外
 国語を学習している方や、今は外国語学習をしていないが自分の過去の外国語学習につ

1

日本人はなぜ英語が下手なのか——その1 動機づけ

いて振り返ってみたい、という方には学習者の立場から、また外国語を教えている先生方や、外国語教育に携わりたいという希望をもっている読者の方などには教師の立場から、本書に興味をもっていただけたらと思います。

本書の構成は以下のようになっています。まず、第1章と第2章で、日本人はなぜ英語が下手なのか、という問題に答えます。第1章では学習動機の弱さ、第2章では日本語と英語の距離、という要因をとりあげて、日本人の英語下手をそれぞれ説明します。第3章では、外国語学習にどんな学習者が成功するか、年齢、性格、適性など、いくつかの要因についてその影響を論じます。第4章では、第二言語習得がおこるメカニズムについて、これまでわかっていることを説明します。第5章では、効果的な教授法・学習法の問題を、第二言語習得研究の歴史をたどりながら検討します。最後に、付録として、今までの研究成果から、外国語学習のときに気をつけるべきことをまとめてみました。

それでは、第二言語習得研究の世界へ、ようこそ。

日本人はなぜ英語が下手なのか。この問題についてはいろいろ意見があります。そもそも本当に日本人は英語ができないのか、という問題もありますが、たとえば、北米の大学に留学を希望する学生の英語力を測るための、国際的に標準化されたTOEFLというテストの結果をみると、日本は最下位に近く、またこの二〇年間、成績は向上していません。誰がこの試験を受けているのか、という問題もあるので鶴呑みにはできませんが、あまりできないことには異論はないでしょう。では、なぜできないのでしょうか。

数年前に、第二言語習得の研究者として憤慨したことがあります。ある有名な日本の言語学者が、「日本人が英語が下手なのはこれこれこういうわけだ」と「っだけ」理由をあげていたからです。そして、それにもとづいていろいろ偉そうなことを言っているのです。その一つというのが何の理由だったか忘れてしまいましたが、それはここで